統計解析特論 講義メモ 3 正定値カーネル

カーネル関数を構成する.

Definition 1 (正定値カーネル). 以下を満たす関数 $k: \mathcal{X} \times \mathcal{X} \to \mathbb{R}$ を正定値カーネルという:

1. 対称性: $k(x, x') = k(x', x), \forall x, x' \in \mathcal{X}$ **2.** 非負定値性: $x' = 1, 2, 3, \dots, x' = 1, \dots, x_n \in \mathcal{X}$

$$n \times n$$
 対称行列 $K = \begin{pmatrix} k(x_1, x_1) & \cdots & k(x_1, x_n) \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ k(x_n, x_1) & \cdots & k(x_n, x_n) \end{pmatrix}$ は非負定値行列

$$\iff \sum_{i,j=1}^n c_i c_j k(x_i, x_j) \ge 0, \quad \forall n \in \mathbb{N}, \quad \forall c_1, \dots, c_n \in \mathbb{R}.$$

Kをグラム行列という.

Mercerの定理

(大雑把には) k(x,x') が正定値カーネルなら、関数 $x\mapsto \phi(x)\in\mathbb{R}^D$ が存在して

$$k(x, x') = \phi(x)^T \phi(x')$$

 $\mathsf{cva}(D = \infty \mathsf{babbas}).$

- L₂ 収束
- 絶対一様収束

参考文献:赤穂本, 福水本,

Mercer の定理の解釈:

k(x,x')が正定値カーネルなら $k(x,x') = \sum_i \phi_i(x)\phi_i(x')$.

 \iff 統計モデル $\sum_i \phi_i(x)\theta_i$ を仮定して推定.

例 **1.** 線形,多項式,ガウシアンカーネルは正定値カーネル. 多項式 $(1+x^Tx')^k$ はあとで証明

ガウシアン、ラプラス:Bochnerの定理で証明: 積分表現を与える.

$$e^{-\gamma(x-y)^{2}} = \frac{1}{2\sqrt{\pi\gamma}} \int_{-\infty}^{\infty} e^{i(x-y)w} e^{-w^{2}/(4\gamma)} dw$$
$$e^{-\gamma|x-y|} = \frac{\gamma}{\pi} \int_{-\infty}^{\infty} e^{i(x-y)w} \frac{1}{w^{2} + \gamma^{2}} dw$$

正定値カーネル性質 -

- 関数 $g: \mathcal{X} \to \mathbb{R}$ に対して g(x)g(x') は正定値カーネル.
- k(x,x'), $k_1(x,x')$, $k_2(x,x')$ が正定値カーネルのとき
 - **1.** 非負定数 $a, b \ge 0$ に対して $a + b \cdot k(x, x')$ も正定値カーネル.
 - **2.** $k_1(x,x') + k_2(x,x')$ も正定値カーネル.
 - **3.** $k_1(x, x')k_2(x, x')$ も正定値カーネル. したがって $k(x, x')^p$, $p \in \mathbb{N}$ もカーネル関数.
- $k_1, k_2, \ldots, k_n, \ldots$, が全て正定値カーネルのとき

$$k = \lim_{n \to \infty} k_n$$
 (各点収束) も正定値カーネル

カーネル関数から定まる統計モデル

正定値カーネル $k(x,x'), x,x' \in \mathcal{X}$ から定義される関数の集合:

$$\widetilde{\mathcal{H}}_k = \left\{ \left. \sum_{i=1}^N k(\cdot, \boldsymbol{z}_i) \beta_i \, \middle| \, N \in \mathbb{N}, \boldsymbol{z}_i \in \mathbb{R}^d, \beta_i \in \mathbb{R} \right\}.$$

note: 線形モデル $\{\sum_i \phi_i(x)\theta_i \mid \theta_i \in \mathbb{R}\}$ の別表現.

 $\widetilde{\mathcal{H}}_k$ に内積を定義する:長さや角度 (直交性) を定める. 推定量の記述,解釈に役立つ.

内積

- **1.** 対称性: $\langle f,g\rangle = \langle g,f\rangle$
- **2.** 双線形性: $\langle af + bg, h \rangle = a \langle f, h \rangle + b \langle g, h \rangle$
- **3.** 正値性: $\langle f, f \rangle \ge 0$
- **4.** $\langle f, f \rangle = 0 \Leftrightarrow f = 0$.

H 上の内積:

$$\langle k(\cdot,x), k(\cdot,x') \rangle = k(x,x')$$
 & 双線形性.

$$||f|| = \sqrt{\langle f, f \rangle}$$
.

- ⟨,⟩の定義と正定値カーネルの性質から 1,2,3 成立.
- 1,2,3 ⇒ シュワルツ不等式 |⟨f,g⟩| ≤ ||f||||g|| ⇒ 4
- 上の内積は $f \in \mathcal{H}$ の表し方に依らない(ことを言う必要がある)

例 2.

$$\langle k(\cdot, x_1) - 2k(\cdot, x_2), k(\cdot, x_3) \rangle = k(x_1, x_3) - 2k(x_2, x_3)$$
$$||k(\cdot, x) - k(\cdot, x')||^2 = k(x, x) + k(x', x') - 2k(x, x')$$

再生性

 $f \in \widetilde{\mathcal{H}}_k, x \in \mathcal{X}$ に対して以下が成り立つ:

$$\langle f, k(\cdot, x) \rangle = f(x).$$

$$\langle f, k(\cdot, x) \rangle = \sum_{i=1}^{N} \beta_i \langle k(\cdot, z_i), k(\cdot, x) \rangle$$
$$= \sum_{i=1}^{N} \beta_i k(z_i, x) = \sum_{i=1}^{N} k(x, z_i) \beta_i = f(x)$$

再生性を使うと $\langle \cdot, \cdot \rangle$ が内積であることが証明できる. ||f|| = 0のとき、任意の $x \in \mathcal{X}$ に対して

$$|f(x)| = |\langle f, k(\cdot, x) \rangle| \le ||f|| ||k(\cdot, x)|| = ||f|| \sqrt{k(x, x)} = 0$$

より fは \mathcal{X} 上の零関数となる。よって ||f|| = 0ならf = 0となる。

線形モデルとの対応:

$$egin{align} oldsymbol{x} & \mapsto k(oldsymbol{x}, \cdot) \in \widetilde{\mathcal{H}}_k, \ oldsymbol{w} & \mapsto f \in \widetilde{\mathcal{H}}_k, \ oldsymbol{w}^T oldsymbol{x} & \mapsto \langle f, k(oldsymbol{x}, \cdot)
angle = f(oldsymbol{x}) \end{aligned}$$

§ 再生核ヒルベルト空間

Reproducing kernel Hilbert space: RKHS と略す.

完備化:コーシー列が収束列になるように「穴を埋めた」空間.

(例: ℚを完備化 ⇒ ℝ)

- \mathcal{H}_k に対しても再生性が成り立つ: $\forall f \in \mathcal{H}_k, \ \langle f, k(x, \cdot) \rangle = f(x)$. 完備化の定義から証明できる(証明略).
- (完備化しても) $f \in \mathcal{H}_k$ は \mathcal{X} から \mathbb{R} への関数として表現できる(証明略).

カーネル関数を用いた推定

- 1. カーネル関数 k(x,x') を定める
- **2.** k(x,x') から RKHS \mathcal{H}_k が定まる
- 3. データから回帰関数 $f(x) + b \in \mathcal{H}_k + \mathbb{R}$ を推定する.

カーネル関数 k を用いて推定

 \iff 統計モデルとして RKHS \mathcal{H}_k を仮定

正定値カーネルに対応する関数空間

- m 次多項式カーネル: $k(x,x')=(1+xx')^m, x,x'\in\mathbb{R}$. $\mathcal{H}_k:m$ 次以下の多項式のなす線形空間
- ガウシアン・カーネル: $k(x, x') = \exp\{-\gamma(x x')^2\}, x, x' \in \mathbb{R}$.

$$\mathcal{H}_k = \left\{ f \in L_2(\mathbb{R}) \, \middle| \, \int |\mathcal{F}(f)(w)|^2 e^{w^2/(4\gamma)} dw < \infty \right\}$$

 $\mathcal{F}(f)$: fのフーリエ変換. 周波数成分が指数的に減衰する関数の集合

表現定理

データ $D = \{(x_1, y_1), \dots, (x_n, y_n)\}$ に対して、学習アルゴリズム

$$\min_{f,b} L(f(x_1), \dots, f(x_n), b; D) + \Omega(\|f\|^2), \quad f \in \mathcal{H}_k, \quad b \in \mathbb{R}$$

を考える。 Ω は単調増加関数とする $\Omega(\|f\|^2)$ は正則化項に対応)。このとき f の最適解は

$$f(\cdot) = \sum_{i=1}^{n} k(\cdot, x_i) \beta_i, \quad \beta_i \in \mathbb{R}$$

と表せる。

Proof. $S = \mathrm{span} \{k(\cdot, x_1), \, k(\cdot, x_2), \, \dots, \, k(\cdot, x_n)\}$ とする. 直交補空間を \mathcal{K}^{\perp} とする. $f = f_1 + f_2, \, f_1 \in \mathcal{S}, \, f_2 \in \mathcal{S}^{\perp}$. このとき

$$f(x_i) = \langle f_1 + f_2, k(\cdot, x_i) \rangle = \langle f_1, k(\cdot, x_i) \rangle = f_1(x_i),$$

$$||f||^2 = ||f_1||^2 + ||f_2||^2 \ge ||f_1||^2.$$

したがって

$$L(f(x_1), \dots, f(x_n), b; D) + \Omega(\|f\|^2)$$

$$\geq L(f_1(x_1), \dots, f_1(x_n), b; D) + \Omega(\|f_1\|^2).$$

すなわち、部分空間 $\mathrm{span}\{k(\cdot,x_1),\ldots,k(\cdot,x_n)\}$ 上に f の最適解が存在する。 \blacksquare

$$\min_{f,b} L(f(x_1),\ldots,f(x_n),b;D) + \Omega(||f||^2), \quad f \in \mathcal{H}_k$$

$$\Leftrightarrow \min_{\beta,b} L\left(\sum_{i=1}^{n} k(x_1, x_i)\beta_i, \dots, \sum_{i=1}^{n} k(x_n, x_i)\beta_i, b; D\right) + \Omega(\boldsymbol{\beta}^{\top} K \boldsymbol{\beta})$$

ただし $K_{ij} = k(x_i, x_j)$.

- 表現定理:
 - \mathcal{H}_k が無限次元でも、有限次元の最適化問題を解くことで、厳密な最適解が得られる。
- さまざまな損失関数で成立

k(x,x'):が正定値カーネルでないとき:

統計モデル:
$$\mathcal{H}' = \left\{ f(x) = \sum_{i=1}^{N} k(x, z_i) \beta_i \,\middle|\, N \in \mathbb{N}, \, \beta_i \in \mathbb{R}, \, z_i \in \mathcal{X} \right\}.$$

- 正則化: $\langle f, f \rangle$ ではなく $\sum_k \beta_k^2$ など.
- 内積空間と対応せず、統計的性質を調べにくい。

カーネルパラメータの選択

カーネルパラメータ:カーネル関数を決めるパラメータ.

- 多項式カーネルの次数 $m \in \mathbb{N}$.
- ガウシアン・カーネルの幅パラメータ $\gamma > 0$.

正則化パラメータ,カーネルパラメータ:K-fold CV などで決める.

カーネルパラメータの選択:ガウシアン・カーネル

- 正則化パラメータの候補: $\lambda_1, \ldots, \lambda_p$
- カーネル幅パラメータの候補: $\gamma_1, \ldots, \gamma_q$
- (λ_i, γ_j) を用いて回帰関数を学習する.このときの予測誤差の推定値を cross validatoin で計算: $\widehat{e}_{\mathrm{CV}}(\lambda_i, \gamma_j)$.
- $\hat{e}_{CV}(\lambda_i, \gamma_j)$, $i = 1, \ldots, p, j = 1, \ldots, q$. のなかで最小値を達成する (λ, γ) を用いた回帰関数を推定量とする.

K-fold CV を用いるとき pqK回の推定を行う.

ヒューリスティクス(発見的解法)

- 交差検証法は一般に計算コストが大きい.
- モデルパラメータが複数ある場合:以下のような工夫をする
 - 並列計算
 - いくつかのパラメータを適当な値に固定, 残りのパラメータを交差検証法で決める。

ガウシアンカーネルの γ の選び方

ガウシアンカーネルの γ をヒューリスティックに決める.

$$k(x, x') = \exp\{-\gamma ||x - x'||^2\}$$

• 計算の安定化のため, $\gamma || \boldsymbol{x}_i - \boldsymbol{x}_j ||^2$ が「ほどほどの値」を取るようにする.

$$d^2 := \mathtt{median}\{\|oldsymbol{x}_i - oldsymbol{x}_j\|^2 : i < j\}$$
 (中央値)

として
$$\gamma = \frac{1}{d^2}$$
 とする

- $\gamma \| \boldsymbol{x}_i \boldsymbol{x}_i \|^2$ は 1 のまわりに分布
- グラム行列の数値計算が安定

推定結果

- カーネルパラメータ:sigma = 0.98 (median-heuristics)
- 正則化パラメータ λ : いろいろ変える.

